The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	目で見るWHO　第80号　表紙・目次等
Author(s)	大谷, 順子
Citation	目で見るWHO. 2022, 80, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89350
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ISSN 2434-7205

目で見る WHO

2022 春号

No.80

公益社団法人
日本WHO協会

CONTENTS

P1	ごあいさつ	大谷　順子
P2-5	巻頭特集	
	新型タバコの本当のリスク	田淵　貴大
	セミナー・イベント報告	
P6-9	1. 第36回日本国際保健医療学会学術大会ランチタイムセミナー「COVID-19の感染の波とセルフケアに必要なこと」報告	岸　智明
P10-13	2. 国際地域看護研究会の歩みとこれから ～ 20周年を迎えて～	国際地域看護研究会
P14-17	3. 第17回　日本公衆衛生学会・自由集会	大西　眞由美
	「公衆衛生に国境はない」:COVID-19で取り残されてしまった人達	西原　三佳
P18-19	NGO・団体紹介	
	ペシャワール会/ Peace（Japan）Medical Services	村上　優
P20-21	留学生日記	
	多様な価値観に囲まれて興味を追求するイギリス医学部留学	島戸　麻彩子
P22-27	WHOニュース　2021年11月／ 12月／ 2022年1月	
	関西グローバルヘルス（KGH）の集い	
	オンラインセミナー第4弾 COVID-19 そのとき、現場は動いた!	
P28	第1回:病院編	加藤　美寿季
P29	第2回:行政・保健所編	小松　法子
P30-31	追悼　島尾忠男先生	
	生涯現役の生き方から学ぶ　―島尾忠男先生を偲ぶ―	石川　信克
P32	OpenWHOのご紹介	
P33	International Days（健康関連の国際デー）	
P34-35	日本WHO協会沿革／ WHO憲章	
P36	WHOの地域事務局と管轄エリア	
P37	寄付者のご芳名／編集委員のページ	渡部　雄一
P38	入会案内	

ごあいさつ

日本WHO協会　理事
大阪大学大学院人間科学研究科
教授・国際交流室長
大谷　順子

WHO中国代表事務所に勤務していたことがあります。2015年に終わる国連ミレニアム目標(MDGs)にむけて、ポストMDGsをどうするかの議論がなされていたときです。中国は次々と目標を達成し、優等生であることを示す道具として用いていました。中国でもすでに人口高齢化や生活習慣病、また高度経済成長に伴う環境エネルギー問題も深刻であり、MDGsに挙げられている目標だけが必ずしも最優先ではなく、使い分けていたともいえましょう。（拙書『国際保健政策からみた中国』九州大学出版会, 2007年）中国政府衛生部は、エイズや結核などの感染症対策、母子保健、ユニバーサルヘルスカバレッジ（UHC）の3つを入れることを要求しました。結局、持続可能な開発目標（SDGs）として、大きく転換しました。

2003年当時は、北京でSARS流行の対応という歴史的な経験しましたが、その後、2020年初めごろから拡がったコロナ禍がもっと長期にわたっており、2022年の今なお世界は禍中にあります。現在、勤務する大学でも、遠隔講義はもとより、交換留学のキャンセル、海外現地調査や国際学会へのオンサイト参加も困難となるなど、若い次世代が、なかなか外に出ていく、受け入れることができない日々が続いています。そのなかで、中村安秀理事長の得意とされてきたお働きのひとつである次世代育成に果たす貢献も日本WHO協会の大きな役割です。

WHOは1990年に緩和ケアの定義として「生きることのためだけでなく、死の過程に敬意を払うこと」と説明し、2002年改訂版には、「生命を肯定し、死にゆくことを自然な過程と捉える」という文言（2018年訳）も含みました。本原稿を執筆しながら、私事ですが、コロナ禍の病院での帰天より、自宅を死に場所に選んだ敬愛する父に手探りの方法で寄り添いながら、介護と育児のダブルケアを体験することになりました。2、3か月前まで現役の医師でしたので、本人も、家族も、また多くの長年の患者さんたちも戸惑いましたが、父の意思と生き方・死に方を通して学ぶこととなりました。この間に多くの医療従事者と出会い、父の患者さんたちからのお手紙を通して、この職種の素晴らしさを思う日々です。そのなかで、改めて、様々な仕事の方々が力を合わせて、人々の健康の問題に取り組むことの尊さを再認識しました。私が、国際保健の道に進んでみたいと思ったのは、国際ロータリークラブ（RI）、日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）、アジア協会アジア友の会（JAFS）などの機関誌がそれらの団体で役職をしていた父や祖父に送られてきているのをよく目にして影響を受けていたと思います。目にされた多くの方が、日本WHO協会の活動に興味を持っていただけることと自信をもって、本誌『目で見るWHO』80号をお届けいたします。

2022年4月